院政・鎌倉時代における字音の連濁について

小林芳規

一、意義・資料について

日本語の複合又はそれに準ずる要素連合において、後位要素の第一音節の清音が濁音化する現象は、連濁と呼ばれる。この現象は、文献以後、ほぼ室町時代末期頃までにおいて、二つの場合があるとされ、その一つが普通の、母音に終る音節に連なる場合のもの、他の一つがシナ語の鼻音と、それが撥縁となって成立したと考えられる撥音に連なる場合とであるとされる。[1] 前者は、「ヤマガハ（山川）」のような和語におけるもので、文献の初期のものから現われているが、この連濁は何等の法則も立て難いほど、言わば氣まぐれに現われており、一方、「進退（シンダイ）」のように、シナ語の鼻音と撥音（的なもの）に接する場合の連濁は、少くとも室町末期頃までは「ウ・ムの下濁る」など括られ得たように、前者に比べて、比較的規則正しく行われていたと見てよいと言われる。[2] この二つは、成立の原因は無論のこと、現代語に流れ入る過程も異なると考えられる上に、前者の歴史的考察に必要な平安時代・鎌倉時代には清濁の明らかな資料が不十分であるので、本稿では、後者の連濁を對象とすることにする。

字音の連濁の發生期とその實態、及びその現代語に傳えられる過程については、國語史上の問題としてだけでなく、現代語の源流を探る意味でも、重要な課題であるにも拘らず、十二分に解明されてはいない。從來は、室町末期の吉利支丹資料、及び奥村三雄氏[3]の天台宗・眞言宗等の誦經音を傳えた後世の資料による調査等があるが、鎌倉時代及びそれ以前における、字音の連濁の實態を、直接當時の資料に基づいて究明することは未だなされていない。しかし、この現

象については、早くから「本濁」（漢字本來の濁音）に對する「新濁」として一部の古人の間には注意され、④院政時代にその符號を用いて兩者を區別した資料も現存しており、又、鎌倉時代には、日本語におけるこの現象に基づく幾つかの語について記錄に書き止めたものもあったが、それも一部分に過ぎず、當時のより廣い樣相やその歷史的意義については、殆ど觸れられない現狀である。その大きな障碍は、恰好な資料に惠まれなかった所にある。

連濁の認定には、先ず、濁音であることの明らかに表記された資料が必要である。濁音を表示した資料には、次の三種が擧げられる。第一種は、漢字や假名に「゜」「ᵖ」「ᵐ」「△」等の濁音符を付けた資料である。鎌倉時代以前では、その性格上、大部分が訓點資料である。第二種は、漢字の字音を示す爲に、類音の漢字を、本文の漢字に傍記した資料である。これも訓點資料が殆どである。第三種は、所謂宛字を用いた資料である。その宛字の漢字音と、宛字に代用された正字の字音との清濁の相違に着目する方法によるものである。

以上の三種の中でも、第一種の、濁音符を付けた訓點資料が主要資料となるのは言うまでもない。但し、濁音符の成立は、十一世紀初頭頃であり、しかもこの世紀には、陀羅尼の清濁を辨別することが主であって、一般の漢字に清濁を音符で示すのは院政期以降が普通であった。⑤從って、連濁の研究の主對象となる時期は、資料の制約から、院政期以降となる。この事は、恐らく單なる偶然ではなく、その背景に、わが國における清音濁音の音韻的對立の自覺の問題が存しているのであろう。第二種の、類音の漢字を傍記した訓點資料は、時代的に偏っていて、平安初期資料が殆どである。しかもその適例は少く、この時期には連濁の例も把捉し難い。ただ春日政治博士が、聖語藏本央掘魔羅經平安初期點の字音點について報告された中で、⑥

例へば、旋字は本來濁音であるが、常は清音に讀んで、

蜿轉腹行卅九旋、亦復如是（卷一ノ十八）

の場合は清音であり、

往至母所、根宇若 凑旋多匠（巻一ノ十八）

などは連濁で濁ったやうに見えるのである。

と指摘されたのは重要であるが、尚考慮の餘地もあり、又、この種の例は多くはないので、考察の主對象からは暫く擱かねばならない。第三種の、宛字の資料は、片假名交り文や公卿日記・古文書等に見られる。特に院政期以降の片假名交り文に適例を見るものである。

本稿の對象時期は、右掲の理由によって院政期が上限となり、續く鎌倉時代を併せて、院政鎌倉期とした。それによって從來明らかにされた室町時代より前代における、連濁の實態の一面を窺おうと意圖するものである。

二、連濁についての、中世の記事

連濁が、鎌倉時代初期に既に、發音上注意される事象であったことは、次の北院御室守覺法親王（建仁二年一二〇二五十二歳寂）の「右記」の記事で知られる。

建久三（年）八月廿四日、今日、六角中納言親經訪二來閑室一。（略）次問云。源宰相。平宰相。藤宰相等。濁而讀レ之。每人事、源中納言。平中納言。藤中納言等中字。或濁或清呼レ之。是可レ濁歟。故御所被レ仰之。又權僧正之僧字清濁相交讀レ之。清而呼歟猶多レ類歟。是又可レ濁歟。同被レ仰レ之。又聖寶僧正名云二尊師一。師字可レ濁相傳畢。清呼歟有レ之。非二名僧之所爲一歟。此條々如何。答。尊師歟。更不レ及二愚判一。上件條々皆可二濁呼一也。清事立二有職一輩中未二承及一。禁中之中字。勸盃之盃字。又清呼歟繁多。是同可レ濁也云々。又同車輦車車字可レ濁也云々。予問云。或博覽有才接官。俳徊徊字濁言レ之。故御所清被レ仰レ之如何。答云。是可レ清歟。濁歟不レ可レ然云々。此不審共雖レ非二差事一。此記者本自爲二童蒙一成レ之一帖也。故書レ之。且與二大才老翁一交談之事也。雖レ爲二淺旨一何不レ賞二彼卿一哉（「群書類從」二十四輯）

この本は、その奥書によると、仁和寺十三世守覺法親王の自筆本を、東寺長者の隆證僧正（文永三年一二六六、八十六歳入滅）が、文永二年七月に鳴瀧御所で書寫し校合した本を、後、鎌倉雪下新宮別當坊で、海賢等が、建武四年、應永十六年などに轉寫をしたものである。隆證は、「眞俗交談記」（建久二年九月十日記）の書寫者でもあり、又、貞應二年（一二二三）には、北院御室守覺法親王の仰で加點した所の「性靈集」（醍醐寺藏本）を讀んでいる。

「右記」の記事は、「宰相」の「宰」（齒音清）、「中納言」の「中」（舌音清）が、「源」「平」「藤」に後接して濁音となり、「權僧正」の「僧」（齒音清）、「導師」の「師」（齒音清）、「禁中」の「中」、「勸盃」の「盃」（唇音清）、「同車」「聳車」の「車」（齒音次清）が、これらの複合語において濁音となることの事實を物語っており、當時、連濁の事象が同語を連濁しない場合との對比において、注意されたことを知ることが出來る。この記事から當時の連濁について次の諸事項を窺いうる。

一、連濁音の直前の漢字は、「源」（山攝・平聲）、「權」（山攝・平聲）、「勸」（山攝・去聲）、「聳」（山攝・上聲）の舌内鼻音〔n〕か、「平」（梗攝・平聲）、「藤」（曾攝・平聲）、「同」（通攝・平聲）の喉内鼻音〔ŋ〕か、「禁」（深攝・去聲）の唇内鼻音〔m〕であり、他に一例は「導」（効攝・去聲）の〔u〕で終る音である。「立有職輩」の規範としては、これらの音の後位要素は連濁に發音するというものがあった。これは、鼻音に接する場合には連濁するという法則が、有職輩の規範、「名僧之所爲」として、當時存した證となる。

二、但し、鼻音以外の「効攝」〔u〕に接する場合にも連濁することが一部に起っていた。しかも鼻音に接する連濁と共に、有職輩の規範の一部となっていた。

三、右の鼻音等に接する清音字でも、當時、連濁させずに、清音に發音する人もあり、又その方が「繁多」である複合語もあった。

四、「俳徊」のように、前接音が「俳」（蟹攝・平聲）で、〔i〕母音で終る音の後位でも、連濁する人もあったが、これは連濁させない方が正しいという考え方があった。

「効攝」「蟹攝」のように鼻音以外でも、母音[u][i]の後位では連濁が起っており、その中、前者は正しいという規範意識が窺われる。

これらの事項は、後述のように、當時の實際の資料でも認めることが出來る。

次に、「徒然草」の中に、言葉遣について論じた段にも、

「行法も、法の字を澄みていふわろし、濁りていふ」と、清閑寺僧正仰せられき。常に言ふ事に、かゝる事のみ多し。（百六十段）

とあるのは、「法」（腎音清）が「行」（宕攝）の喉内鼻音[ŋ]に後位した際に、連濁に發音するのを可としたものであって、反面、當時清音に發音する人もあることをも物語っており、鼻音の後位の連濁が鐵則でなかったことが知られる。

尚、清濁に關する記事は高山寺藏「聲明ノ文字ノ清濁事」一紙（第一二四函ノ七ノ一九號）明德四年（一三九三）書寫の資料にもある。

或時寶持ノ法師ニ面會ノ次ニ」聲明ノ文字ノカナ書不審ノ條々」此教字ハ一文字カナカ又」二文字カナカ問」答先ツハ表白何ニハ一文字カナナリ但シ散花ノ甚深」教ノ時者二字カナナリ」

一、問對揚ノ安穩者ノンカ又オムカ」答コレ又西方兩説ナリ非ニハ」オムトスルナリ雖然西方説ニハ」ノムト習侍也御願成辨モ非ニハ成辨ト濁テスルヲ」西方ニハ清ミテ成辨トスル也」但シ此辨者西方説ニモ濁事モ有ナリ」（略）

明德四丶十一月廿九日　經門

これも亦、同一語でも清濁兩説のあったことを物語る記事として參考になる。

室町時代に降るが、洞院左府實熙の「名目抄」（群書類從二十六輯、明應九年（一五〇〇）姉小路濟繼書寫識語を持つ）にも有職讀の中に、連濁に關する語もあり、その性格から前代を受けて傳えられたものも少なくないと考えられる。「名目抄」は、「恒例諸公事篇」「付神事仏事」「同臨時篇」「私儀篇」「諸公事公説篇」「禁中所々名篇」「人躰篇」「院中篇」「雜物篇」「衣服篇」「喪服篇」に

ついて、いわゆる有職讀の諸語に交って、連濁の諸語があり、中には、

元三（クワンサン）　後生以三字ニ可令清歟、故注レ之

還昇（クワンショウ）　本音ハシヨウ也、而名目ハシヨ、又濁也

（別箇所）　常ノ音ショウ也、ジヨ名目也　又上ニヒカレテニゴル也

同車　上清下濁也、或人上ハ濁下ハ清不レ可レ然歟、但家説不レ知

同心（トウシム）　當世ノ人ジムヲ清メテ云故注之

見證（ケンショウ）　常音ショウ也依ニ名目一ジヨ也、又上ニ引レテ濁ル也

前祖（セムショ）　常音ソ也然而ショハ名目也上ニ引レテ濁ル也

のように連濁に關する注記もある。この注記の語から次のことが知られる。

一、連濁は「上ニ引カレテ」生じたものという、原因についての正確な把握がある。

二、前接字は鼻音であり、その後位語に連濁が生ずるのが規範とする考え方が窺われる。

三、鼻音に接する清音字でも、連濁させずに清音に發音する人もあった。

四、古くは連濁であった語が、室町時代には新しく變化して清音に發音するようになった語もある。「元三」の注に「後生以三字ニ可令清歟」と疑っている點や、「同心」の注に「當世ノ人ジムヲ清メテ云」とあり、前田家本色葉字類抄にも「同（去發濁）心（上發濁）トウシン」とあることから分る。

五、その聲點によると、連濁の前接字の聲調は、去聲調のものが多い。

實熙の自筆の正本には朱點が無く、底本の聲點は永正十五年（一五一八）等の轉寫の際に加えたものというが、掲出語の中に、注記がなく、單に複合語のみを掲げたものも、底本の聲點とこの名目抄の有職讀を示す意圖より考えて、連濁の語を實熙の正本において多く含むと見られる。その中には、

固關（コゲン）　開關（カイゲン）

のように、前接字が鼻音でない例も散見する。

これらが前代から受け継がれた連濁か、室町時代になって生じたものか定かでないが、後述のように、鎌倉時代から既にこの種の連濁も見られる所である。

名目抄に取り上げられた語は、その篇目からも分るように公事關係の特定語に偏り、文書篇を始め、一般語彙の例を缺いているが、當時一層多くの例があったことと推察されるのである。

三、新濁の符號による諸例について

古く漢字音について、本來濁音である音を「本濁」というのに對して、連濁によって生じた濁音を「新濁」として、その音符を違えて區別して示す資料が、院政時代にある。

書陵部藏四種相違疏一軸は、仁安三年（一一六八）に書寫し差聲した、字音讀みの訓點資料であって、仁安三年の識語は、左のようである。

（墨筆）仁安三年六月二十三日於一乘院御房御學問所賜此書了

（朱筆）仁安三年十一月二十三日亥時於西御門御所申出御本　師匠已講切句差聲　切句差聲畢
所令進給之本也　求法沙門覺演

（朱筆）同年同月子時、爲明年慈恩會堅義、子嶋私記讀始之

奈良興福寺と小島流の眞興（承平四年寛弘元年）の讀みに係ることが知られる。この資料には、全巻に、仁安三年の時の朱筆による聲點が差されており、濁音は「：」又は「・」で明示している。この中、「：」が本濁であるのに對して、「・」は、以下掲げるように、連濁を示したものであることが判明する。（各例の下の〔　〕内は、連濁字の韻鏡における清・次清の別と四聲を示す）

(1) 緣性（二例）〔清去〕　有緣性（二十二例）〔清去〕

因相〔清平〕　前宗〔清平〕

(2) 衆多〔清平〕　兩俱（五例）〔清平〕

宗法（ニコル）〔清平〕（「ニコル」は南北朝貞治五年頃の加筆假名。「法」の聲點は不入聲を示す）

(3) 三種（清上）　三相（二例）〔清平〕

心所法〔清上〕（「三」「心」の聲點は上聲と去聲との中間にあり、毘富羅聲を示す）

後位字は、各字に示したように、いずれも清音であるから、當時、連濁の確かにあったことが知られる。(1)は舌内鼻音〔n〕、(2)は喉内鼻音〔ŋ〕、(3)は唇内鼻音〔m〕であり、總て鼻音の後位字に連濁が生じている例ばかりである。又、前接字の聲調によると、

去聲調の字音の後に起る連濁　（二八例、六語）

平聲調の字音の後に起る連濁　（　五例、一語）

毘富羅聲の字音の後に起る連濁（　三例、二語）

で、去聲調が最も多い。一方、連濁を起した字音の聲調は、

平聲調の字音の連濁（二九例、六語）

上聲調の字音の連濁（　七例、三語）

不入聲の字音の連濁（　一例、一語）

で、去聲調の字音の連濁の例が無いのは注目せられる。

次に、聖衆來迎寺藏妙法蓮華經八軸は、識語を缺くが、本文は院政初期書寫であり、それに鎌倉極初期と目せられる朱筆の假名と同筆の聲點とが加えられている。假名は字音を示すもののみで極めて多く、聲點は全漢字に差されており、和訓を見ないから、本資料は妙法蓮華經八卷を字音讀みにしたものである。字音では、拗音を「クヮ・クヰ・クェ・シャ・シュ」と今日と同じ方式の假名表記で表わし、鼻音の〔m〕と〔n〕とは正しく表記し分けている。聲點は「・」で清音を、「：」又は「。」で濁音を示している。特に「。」は連濁の符號として用いられて、本濁を「：」で表わすのに對している。但し、「。」は卷一と卷二だけであって、何故か卷三以後は、本濁も新濁も「：」で表わして、區別をしていない。しかし、連濁の用例は極めて多くて、當時の連濁の様相を知るのに有益である。

(1)　前接字の韻尾が舌内鼻音〔n〕

〔去〕悋貪（卷一）、神通（卷一、卷二）、大神通（卷二）、群生類（卷一）、天華（卷二）、人間（卷二）、但當（卷二、二例）、眞珠（卷二、二例）、全身（卷二）、曼殊沙華（卷一）、歡喜（卷一、三例。卷二、三例）、大觀喜（卷二、三例）、身體（卷一）、堅固（卷二、三例）、仁者（卷一）、珍寶（卷二、四例）、偏祖（卷二）、

言説（巻二）、聞法（巻二、二例）、

〔平〕轉法輪（巻一。巻二、二例）、演説（巻二）、恪惜（リンシャク）（巻二）、典籍（テンシャク）（巻二）

安置（巻二）、勤修（巻二、二例）信者（巻二）、頓弊（ヒイ）（巻二）、難處（巻二）、見者（巻二）、展轉（巻二）、

巻疏（クヮンショ）（巻二）、百千萬種（巻二）、産生（サン）（巻二）

〔上〕山中（巻一）、八千世界（巻一）、常堅固（巻二）、無數天子（巻二）、諸天子（巻二）、聲聞衆（巻一、二例）、

不聞法（巻二）

世尊説（巻二）、

(2) 前接字の韻尾が喉内鼻音〔ŋ〕

〔去〕東方（巻二）、東西（巻二、二例）、黄金（巻二）、更生（巻二）、香水（巻二）、堂舍（巻二）、大乘經（巻二）、

有衆生（巻二）

兵衆（巻一）、童子（巻一）、精進（巻二、二例）、窮子（巻二、二例）、

經法（巻二）、生風（テフ）（巻二）、

〔平〕講説（巻一）、講法（巻一）、正法（巻一。巻二、二例）、兩足（巻二）、往昔（巻二）往捉（シャク）（巻二）、究竟法（巻一）、

頌科（クヮウシャ）（巻二）、大衆中（巻二）、衆中（巻二）

種種（巻一。巻二、二例）、平正（巻二）、王子（巻二、二例）、長者（巻二、九例）、大長者（巻二）、虫輩（ハイ）（巻二）

〔上〕衆生（巻一、二例。巻二、三例）、諸衆生（巻二）、虚空中（巻二、二例）

恭敬（巻一。巻二、二例）、經者（巻二、二例）、精進（巻二、三例）、常精進菩薩（巻一）、勇猛精進（巻一）

空法（巻二）、浪藉（シャク）（巻二）

(3) 前接字の韻尾が唇内鼻音〔m〕

〔去〕音聲（巻二）、心中（巻二）、三車（巻二）、

三界（巻一。巻二、三例）、三精（巻一）、今世（巻二）、三種（巻二）、

貪惜（シャク）（巻二）、

〔平〕欣仰（巻一）

沈水（巻一）、梵天王（巻二）、

〔上〕如今者（巻二）、三界（巻二）、

(4) 前接字が鼻音以外

疲懈（巻二）

「。」は殆ど、清音字（韻鏡の清・次清）にあり、⑦連濁を示すことは確かである。又、同一語に、連濁音と清音との二様を示すものもある。

玩好（巻二）、聞法（巻二。「法」の去聲點は本のまま）

これは「右記」に記された鎌倉初期の事柄の傍證となると見られる。尚、連濁を含む同一語であり乍ら、二様の聲調を示すものもある。

衆生（巻一、二例。巻二、三例）、諸衆生（巻二）――有衆生（巻二）

精進（巻二、三）例――精進（巻二、二例）

三界（巻二）――三界（巻一。巻二、二例）

いずれも上聲と去聲とに係るものであり、先述の四種相違疏仁安三年の連濁に見た「三相」「心所法」などの毘富羅聲と關聯するものであろうか。

さて、この妙法蓮華經の連濁は、鼻音の後位字に生じている例が壓倒的に多く、院政期の四種相違疏仁安三年點と同じく、當時の連濁の實情を物語っている。所が、一例ではあるが、止攝の「疲」に後位する例の見られるのは、鎌倉時代になると、鼻音以外で母音に後位する新しい連濁の生じたことを示すものと考えられ、「右記」の「俳徊」の連濁の

記事に通じて興味がある事柄である。これは又、次節の訓點資料の連濁例の中、鎌倉時代のものには、鼻音以外に後位する連濁が見出せることと符合する。

前接字の聲調によると、

去聲調の字音の後に起る連濁（六十五例）
平聲調の字音の後に起る連濁（三十三例）
上聲調の字音の後に起る連濁（四十四例）

となって、去聲調の場合が最も多い。一方、連濁を起した字音の聲調は、

平聲調の字音の連濁（七十二例）
上聲調の字音の連濁（　四十例）
入聲調の字音の連濁（　十九例）
去聲調の字音の連濁（　　三例）

となり、去聲調の字音の連濁が、少數乍ら、見られる。院政期の四種相違疏仁安三年點では、去聲調の字音連濁は、皆無であった。

右の二資料は、その符號によって、連濁が區別された結果、院政期から鎌倉時代初期における連濁の實態の一面を知ることが出來たものである。但し、共に呉音系と見られ、しかも全卷を字音讀みしたものであるから、それが、當時の通行語の實情を反映したものか否かは、訓讀を前提とした資料や片假名交り文等における連濁例と比較しなければならないが、それは後述のように多くの共通語や共通性を有するものである。

四、訓點資料の、訓讀された文章における連濁

訓讀を前提とした訓點資料で、連濁の[8]管見に入ったのは、次の諸例である。（用例の上の數字は、前接字の韻尾を示し、(1)が〔n〕、(2)が〔0〕、(3)が〔m〕、(4)が鼻音以外である）

○興福寺藏高僧傳康和二年（一一〇〇）點

この資料は清音を「。」、濁音を「△」で記している。從って連濁は次の諸例が拾われる。

(1) 諸天懽（クワン）—意なり（四一五行）〔「意」清上〕

(1) 涎（セン）—唾身に沐て（四八九行）〔「唾」次清〕

この資料では、後の資料に連濁となっている語が、連濁を生じていない左の例がある。

(3) 斟（ム）酌す（三七三行）

○高山寺藏胎藏次第長治二年（一一〇五）慶嚴書寫（同期朱點）（重文一函ノ一〇四號）

(2) 南无東方寶幢佛〔「方」は清平。「東」は通攝平聲〕

(3) ミミ南方花開敷佛〔「南」は咸攝平聲〕

○輪王寺藏金剛般若經集驗記天永四年（一一一三）點

(2) 周處（ハウカウ）（二丁裏）〔次清上〕

(2) 彭鏗（ハウカウ）（二十二丁裏）〔次清平〕

尚、次の一例は疑の殘るものである。

寶室寺〔五十五丁裏〕〔「室」は清入聲。上聲濁點は本のまま〕

「寶（上聲濁點も）」は朱筆で「イ寶」として、本文「實」字の右傍に書き加えたもので、「實」には聲點はない。「寶」に後位して連濁したとすれば「效」攝の後の連濁となる。「室」の上聲濁點も問題であり、固有名詞であることも係って尚考慮すべき所である。

○神田喜一郎博士藏白氏文集天永四年點

(2) 黄著（巻三、十六丁）〔清平〕

この資料の「°」點は、保延六年（一一四〇）に加筆のものと見られる。

○高山寺藏念誦次第天養元年（一一四四）點（重文二函ノ二三五號）（聲點は朱筆）

(1) 本尊〔清平〕

(1) 現當〔清平〕

院政前半期においては、濁音符の資料が多くない上に、連濁の例も、後半期に比べて、多くは拾われない。中には、前半期資料では、連濁しない語が、後半期資料では連濁している例もある。右掲の高僧傳康和二年點の「斟酌」は、次掲の三教指歸仁平四年點では連濁している。

○天理圖書館藏三教指歸仁平四年（一一五四）點

(1) 進°退（十六丁裏、三十五丁裏）〔次清去〕

(2) 方°戒（六丁表）〔清上〕

(2) °孔°子（十九丁表）〔清上〕

(2) 經—典（十四丁表）〔清上〕

(3) 毫—兎（サムトウサキ）（十丁裏）〔次清去〕

(3) 斟（シム）—酌（シヤク）（十五丁裏、三十六丁表）〔清入〕

總て鼻音に後位する場合である。

○高山寺藏四十手要決義長寛（一一六三）頃點

(2) 平（ヘイフク）覆之義也〔次清入〕

○高山寺藏金剛界儀軌養和元年（一一八一）點

(2) 覩ヨニ相好ニヲ〔清上〕

○書陵部藏大方廣佛華嚴經卷第四十壽永二年（一一八二）點

(1) 群—生（二五三行）〔清平〕

(1) 難—思（二六七行）〔清平〕

(1) 人—中（三二二行）〔清平・去〕

(1) 灌—頂（三四二行）〔清上〕

(1) 歡—喜（シテ）（三四八行）〔清上〕

(1) 塵數刹（二六七行）〔清上〕

(1) 勤修ッ（二四九行）〔清平〕

(1) 尊法給（二三五行）〔清入〕

(1) 善—根ヲ（三三一行）〔清平〕

(2) 境界（二七八行）〔清去〕

(2) 勝解（二五五行）〔清上〕

(2) 往—昔（三二四行）〔清入〕

(3) 音聲海ヲ（二一九行、二七一行）〔清平〕

(3) 機侮ス（二二八行）〔清上〕

(3) 心性（一二六行）〔清去〕

(3) 三世（二四〇行）〔清去〕

連濁の例が多いが、前接字は鼻音のみであり、しかも去聲調の字が多く、平聲調がこれに次ぐ。連濁した字音の聲調は、平聲調が多く、去聲調は「善根」の一語である。

○書陵部藏大乘本生心地觀經院政末期點

(2) 精舍（三五〇行）〔清上〕

以上の院政期の資料の連濁は、鼻音に後位する場合であり、その他は金剛般若經集驗記天永四年點の「寶室寺」の疑わしい一例のみであった。

鎌倉時代の資料になると、次の第一例のように、鼻音以外の音に後位した連濁が、目立っている。

○興福寺藏因明義斷正治二年（一二〇〇）點

(4) 秀出〔次清去〕（「秀」は流攝去聲）

○猿投神社藏古文孝經建久六年（一一九五）點

(1) 山川之風を（「サ（平）ン（平）セ（上濁「：」符）ン（平）」の朱筆假名聲點がある）〔次清平〕

「サンセン」の「セ」の濁音符「：」は新濁を示し、

俯（フ）—仰（キヤウ）（「キ（上濁「：」符）ヤ（上）ウ（上）」の朱聲點がある）〔「仰」は「清濁」〕

の「キヤウ」の「キ」の濁音符「：」が本濁であるのと使い分けている。この「山川」の連濁は、各假名毎に聲點を差しているのが重要である。「山川」の連濁の語は次の資料にも存する。

○大東急記念文庫藏往生要集元久元年（一二〇四）點

(1) 山川（センセン）溪（ケイ）—谷（コク）尚ッ現ス（「川」は次清平）

○東大寺圖書館藏釋摩訶衍論承元二年（一二〇八）點

(1) 一山（セン）界ノ中ニ〔清去〕

(2) 東方（ハウセンヨリ）〔清平〕

○觀智院藏世俗諦文鎌倉初期點（丁數は覆製本による）

(1) 觀—喜（八丁裏）〔平上〕

(1) 法花文—句（七丁裏）〔清平〕

(1) 山—海—經（二十八丁裏）〔清上〕

(1) 報恩—經（八丁裏）〔清平・去〕

(1) 丹—朱（十一丁表）〔清平〕

(1) 閑散（六丁表）〔清去〕

(2) 莊子（三十七丁裏。「十二丁表、十八丁表、四十丁裏、四十三丁表」の例は聲點のみで假名がないもの）

(2) 榮啓—期（三十八丁裏）〔「啓」は次清上〕

(3) 阿含經（八丁表）〔清平・去〕

(3) 准—南—子（十五丁表）〔清上〕

連濁の大多數が、鼻音に後位したもので、中でも舌内鼻音の後の例が多い。尚、前接字の聲調は、去聲調が多く、平聲調がこれに次ぐ。連濁の字音の聲調には、去聲調の「閑散」が一語見えている。

○法隆寺藏古今目錄抄（嘉禎（一二三五—）より建長（一二四九）頃にかけて法隆寺僧の顯眞が書繼）

(2)　榮啓期（エイケイキ）〔次清上〕

(2)　方（ハウ）至〔清去〕

の他に、鼻音以外の效攝の字に後位した連濁例の「調子丸」の一例がある。

(4)　調子（テウシ）丸（巻上）〔清上〕

○坂東本教行信證親鸞自筆草稿本

草稿本には第一次から第三次に亘る假名や聲點の加筆があるが、第一次點は康元元年（一二五七）以前でその後、第二次・第三次點も入滅の弘長二年（一二六三）以前に書き加えられたものと見られる。この草稿本は、聲點を表示するのに、特異な符號を用いており、濁音に「ー」と「。」を用いるが、特に入声では「ー」は舌内、「。」は喉内・唇内の入聲濁音に用い、「。」は特に、喉内・唇内入聲清音に用いていて「。」が他の清音を示すのと區別している。[9] 連濁には次のような多數の語が拾われる。

(1)　前接字の韻尾が舌内鼻音〔n〕

眞心（二例）〔清平〕　眞心　神通〔次清平〕　羅（クヱン）索（シャク）神變眞言経〔「變」は清去〕　身心〔清平〕

現身中〔「中」は清平〕

分身〔清平〕　群生〔清平〕（四例）　群生（「群」「生」共に「ー」は第二次點）　群生海　諸群生　董修〔清平〕

勤修〔清平〕

安置〔清去〕　難思〔清平〕

增正〔清平〕

顔色〔清入〕

前本〔清上〕　千差〔次清平〕　千歳〔清去〕　賢首〔清上〕　顚倒〔清上〕（三例）　邊際〔清去〕

終覓〔清入〕（二例）　專修〔清平〕　禪師〔清平〕

眞言經〔清平〕

本國〔清入〕

演暢〔次清去〕　善根〔清平〕（三例）

萬德〔清入〕　萬德尊〔清入〕

漢書藝文志（「書」は清平）

灌頂（クワン）〔清上〕　灌（クワン）頂經〔清上〕

現身中〔清平〕

偏身〔清平〕　變化〔清去〕（二例）

(2) 前接字の韻尾が喉内鼻音〔ŋ〕

同心〔清平〕（二例）　功勲〔清平〕　功德〔清入〕　功德（三例）　衆生〔清平〕　衆生　衆賢〔清上〕

恭敬〔清去〕（三例）　恭敬

相好〔清上〕

生死（三例）〔清上〕　生死海　報生三昧〔清平去〕　往生經〔清平〕

經家（二例）〔清平〕　經典〔清上〕

摠ソウ相〔清平〕

種種〔清去〕　種敗ハイ

像法（二例）〔清入〕　往生（二例）〔清平〕　往生經

境界〔清去〕

妄想〔清上〕

正覺〔清入〕　正法（二例）〔清入〕　正法時　聖者〔清上〕

證據門〔清去〕　勝計ス〔清去〕　稱計ス〔清去〕　興福寺〔清入〕

(3) 前接字の韻尾が唇内鼻音〔m〕

搞キム狩シュ〔清去〕　音イム曲〔次清入〕　今生〔清平〕　禁キン制〔清去〕

含說〔清入〕　貧ビン〔次清平〕

三種〔清上〕　三世〔清去〕　慚愧（二例）〔清去〕

眠足〔清入〕（「足」の「。」は第二次點）

四念處〔次清上〕

懺悔〔清上去〕

(4) その他

不改（カイ）〔清上〕（四21ウ6）

無價（ケ）〔清去〕（五48ウ7）

尚、同一熟合字で、一が連濁になり、一は連濁でない例もある。

○音曲自然ナルカ（三27ウ2）（「曲」に「。」（清緩）と「。」（濁緩）とあり）

以上の例によると、連濁は字音の三内鼻音の各韻尾の後に起っている例が大部分であることが判る。その前接字の聲

調を、この資料の四聲點で見ると次のようになる。

去聲調の字音の後に起る連濁　四十七例
平聲調の字音の後に起る連濁　二十九例
上聲調の字音の後に起る連濁　四例
聲調を表示する符號のないもの　十五例

去聲調の字音の後の連濁が最も多い。一方、連濁を起した字音の聲調は、

平聲調の字音の連濁　三十二例
上聲調の字音の連濁　三十二例
入聲調の字音の連濁　二十例
去聲調の字音の連濁　十　例

となって、去聲調の連濁が最も少い。これは奥村三雄氏が、天台宗・眞言宗等の漢經音を傳えた後世の資料について調査された傾向と大体通ずる[10]所であるが、上掲の資料と合せると、時代の降ると共に去聲調の字音の連濁も増えていることが窺われる。

次に、(4)「その他」の二例を考えるに、この二例の連濁を起した字音の前接字は、いずれも無韻尼である。この二例の濁音符「ー」は「カイ」「ケ」と同筆で第三次の補加と見られるから、鼻音の後の連濁に後れて右のような少数の連濁が起っていたと考えられる。流攝の連濁は因明義斷正治二年點の「秀出」に既に見られた。「無價」の遇攝の連濁は、次々掲の宗性上人に係る華嚴祖師傳の二例と共に古い例と見られ、鎌倉中期の頃、既にこの種の連濁（「右記」にも記されず、院政期にも例を見ない）の生じていたことが知られる。

○東大寺圖書館藏春華秋月抄第五（宗性草稿。表紙、中味共に「延應元年（一二三九）」の年記がある）

(4) 芝（シ）砌（セイ）〔次清去〕

「芝」は止攝平聲の字である。

○東大寺圖書館藏華嚴祖師傳建治元年（一二七五）點（宗性上人奥書本）

(1) 觀察（サツ）—使（巻下）〔清入〕

(4) 殊—軫（シムヲ）（巻上）〔清上〕

(4) 儒—與（巻下）〔清上〕

「殊軫」「儒與」の「殊」「儒」は共に遇攝平聲の字である。

○醍醐寺藏本朝文粹巻六延慶元年（一三〇八）點（沙門禪兼書寫同時の墨假名と朱聲點がある）

(1) 前接字の韻尾が舌内鼻音〔n〕

〔去〕文—書〔清平〕　勸賞（二例）〔清上〕　文章博士〔清平〕

先—帝〔清去〕　先—朝〔清平〕　賢—聖〔清去〕

〔平〕懸隔（ケン）〔清入〕

勸公〔清平〕　前—蹤（二例）〔清平〕　藤原元方〔清平〕

〔上〕直撰—式—所〔清入〕

〔聲點ナシ〕進—退〔次清去〕　本—朝〔清平〕　天德〔清入〕

(2) 前接字の韻尾が喉内鼻音〔ŋ〕

〔去〕功—課（二例）〔次清平〕

〔平〕溝壑（二例）〔清入〕　當—聸〔清入〕　榮爵（二例）〔清入〕

昇進（ショウ）〔清去〕　恩詔〔清去〕　當今〔清平〕　貞觀〔清平・去〕

重—山〔清平〕　太政官|史生等〔清平〕　上官|諸司〔清平〕

〔上〕往—古（二例）〔清上〕　冬至〔清去〕　講書〔清平〕

〔聲點ナシ〕唐—國〔清入〕　昌泰（シャウタイ）〔次清去〕

(3) 前接字の韻尾が唇内鼻音〔m〕

〔去〕兼—官〔清平〕　心中〔清平〕

臨功〔清平〕

〔平〕任—中〔清平〕　任終（シウ）（二例）〔清平〕　蔭孫〔清平〕

(4) 前接字が鼻音以外

提撕（サイ）〔清　平〕（「提」は蟹攝平聲）

穀倉〔次清平〕（「穀」は通攝入聲）

前接字が鼻音であるものの連濁は、やはり多く、中でも、舌内・喉内鼻音が、唇内鼻音より多いが、鼻音の他に、「提撕」の撕、「殺倉」の入聲音に後位する連濁もある。[11] 中でも、入聲音に後位する連濁は、前掲資料には無く、恐らく更に遅れて生じたものであろうが、鎌倉後期のこの資料に見られるのは注意される。又、前接字の聲調が去聲調（九例）よりも平聲調（二十例）が多くなっているのも、時代の推移を窺うものとして注意せられる。

五、和化漢文・片假名交り文の連濁

佛書や漢籍の訓點の字音は、漢文の學習に制約された讀書音の性格を持つが、院政期・鎌倉時代に右掲のような多數の連濁の見られることは、佛書や漢籍の訓讀を離れても、その影響や關聯の分野では、連濁現象が同様に或いはより一層多く、その常用語の中に用いられたであろうことが考えられる。この種の資料として、日本文が日本語で讀む文章を前提として、漢文式に表記された和化漢文、及び片假名交り文とが擧げられる。果して、これらの資料にも、連濁の多くの例があったと推定され、しかも、それと同語で、前節までの佛書や漢籍の連濁と一致するものも少くないのである。

和化漢文に訓點を付けて讀み方を表示した院政・鎌倉期の資料の現存するものは多くはないが、その中から次の連濁が拾われる。

○眞福寺藏將門記承德三年（一〇九九）點

仲夏〔「夏」は清音、「仲」は〔0〕韻尾〕（「ガ」の濁點は單點）

この資料は、濁點を單點「・」で假名の右肩に加えており、その語例が幾つかある。[12]「仲夏」は、連濁と見られる。

○高山寺藏古往來院政末鎌倉初期點

春秋。〔「秋」は次清音。入聲點は本のまま〕　星霜（セイサウ）。〔「霜」は清音〕

「星霜」「春秋」の「星」は喉内、「春」は舌内の鼻音、この種の音に後位する連濁であるが、古往來のような日常所用の消息の中に用いられているのである。

片假名交り文で、院政・鎌倉期のものは、濁音符を付けたものが少い爲に、連濁の使用の全容は分り難いが、そこに多いられた所の限られた宛字の中にさえ次のような連濁を背景に持つと考えられる語例がある。

○打聞集（山口光圓氏藏）長承三年（一一三四）頃書寫

この資料は、所収の説話の内容より作者が天台宗關係僧であることが推定されるが、表紙の書入れから、書寫者も天台宗比叡山關係の僧の手になると考えられる。[13] その宛字の中に次の例がある。

速ニ塔ヲ造給テ此舍利ヲ安持シ奉給ヘリ（二丁裏一行）

造寺勸壽寺云（十三丁表）

文の意味より考えて、前者は「安置」の、後者は「勸修寺」の宛字と見られる。前者の「持」も「置」も八轉止攝舌音所屬字であり、「持」は「濁」の平聲で、「置」は「清」の去聲である。これは「安置」（アンチ）の「置」（チ）が前接字の舌内鼻音に引かれて連濁となり、その新濁音に基づいて、呉音として濁音の「持」を宛てたものであろう。前田本色葉字類抄には「安置」とあり、當時、確かに連濁していたことが分る。訓點資料にも、前掲の聖衆來迎寺藏妙法蓮華經字音點・草稿本教行信證にも「安置」の連濁した例がある。

後者の「壽」も「修」も共に三十七転流攝齒音所屬字であり、「壽」は「濁」の上聲で、「修」は「清」の平聲である。これも亦「勸修寺」の「修」（シュ）が前接字の舌内鼻音に引かれて連濁となり、その新濁音に基づいて呉音として濁音の「壽」

を宛てたものであろう。

○法隆寺蔵法華百座聞書抄院政末期書寫

この本は天仁三年（一一一〇）に成立、院政末期の書寫本は法隆寺に現存している。その幾つかの宛字の中に次の三語がある。

十六相願（表一三二行）（「相觀」の宛字）

亡相天道（表二五二行）（「妄想顚倒」の宛字）

正學（裏二七二行）（「正覺」の宛字）

第一例の「願」も「觀」も共に山攝牙音の所屬字であり、「願」は「清濁」の去聲、「觀」は「清」の平聲であり、これは「相觀」が前接音の喉内鼻音に引かれて連濁した音に基づく宛字であろう。第二例の「道」も「倒」も共に二十五転效攝舌音所屬字であり、「道」は「濁」の上聲、「倒」は「清」の上聲である。前田本色葉字類抄には「顚倒」と單點を付すが、當時上接字の舌内鼻音に引かれて連濁したことは考えられる。資料の性格上、呉音として濁音の「道」はその新濁音に基づく宛字であろう。第三例の「學」も「覺」も三転江攝所屬字であり、「學」は喉音「濁」の入聲で、「覺」は牙音「清」の入聲であり、これも、前接字の喉内鼻音に引かれて「正覺」が連濁した音に基づく宛字であろう。

以上のような片假名交り文の宛字にも現れているとすれば、連濁の語は實際にはもっと多かったであろうと推測されるのである。

輪王寺藏諸事表白一帖は、片假名交り宣命體の佛教説話集の類であり、識語を欠くが、文中に「正治二年（一二〇〇）」「建仁二暦（一二〇二）」「建永二年（一二〇七）」の鎌倉初期の年號があり、書體等より、これを甚しく降らない書寫と見られる。この片假名交り文の漢字には、聲點を差し振假名を付けてあるので、連濁の語も拾い出すことが出來る。

(1)　前接字の韻尾が舌内鼻音〔n〕

〔去〕身心（三十一丁裏）〔清平〕　先師（九十四丁表）〔清平〕

傳燈（十三丁裏、十四丁表）〔清平〕

玄賛（七十丁裏）〔清去〕　眞訪（七十六丁裏）〔次清去〕　前世（二十五丁表）〔清去〕

〔平〕傳殿（十四丁裏）〔清上〕

〔上〕泰山府（タイサンフ）君（四十一丁表）〔清上〕

〔聲點ナシ〕觀喜（九十六丁表）〔清上〕　本主（三十七丁裏）〔清上〕

難産（サン）（四十丁裏）〔清上〕　薫修（九十四丁表）〔清平〕

(2)　前接字の韻尾が喉内鼻音〔ŋ〕

〔去〕衆先ニ（九丁表）〔清平・去〕　亡者（マウ）（七十一丁表、一一五丁裏）〔清平・上〕

〔平〕傍輩（ハウ）（二十二丁裏）〔清去〕　陵山（二十三丁裏）〔清平〕

菅丞相（シヤウ）（四十一丁表）〔清平〕

〔上〕法花堂衆（七十丁表）〔清平〕

〔聲點ナシ〕往古（十丁裏）〔清上〕　同宗（九十七丁表、九十九丁表）〔清平〕　平生（二十九丁表）〔清平〕

不可稱計ス（七十四丁表）〔清去〕

(3)　前接字の韻尾が唇内鼻音〔m〕

〔平〕長旦（三十三丁裏）〔清去〕

〔聲點ナシ〕今生（七十一丁表）〔清平〕　三草（九十六丁裏）〔次清上〕

音信ス（七十九丁裏）〔清去〕　四十六心所（六十七丁表）〔清上〕

(4)　前接字が鼻音以外

西山（二十七丁表）〔清平〕　灰沙（五十六丁裏）〔清平〕　隋者（一〇四丁裏）〔平上〕

嫁娶（八丁表）〔次清去〕

これらは、訓點資料の場合と同じく、鼻音に後位する連濁が多いが、他に「西山」「灰沙」の蟹攝や、「隋者」の止攝の字にも見え、更には、「嫁娶」の假攝の字にも生じている。又、前接字の聲調は去聲調に多く平聲調がこれに次ぎ、連濁の字音には平聲調が多く、去聲調は一例のみが見られる。

鎌倉時代の片假名交り文でも、連濁の語が多く用いられていたことが判るのである。

六、結　　語

以上、院政鎌倉時代の訓點資料を主とし、當時の記錄類の記事を手懸りとし、片假名交り文にも及んで、字音の連濁

の實態を探って來た。判明した主な點は次の諸項である。

一、字音の連濁は、鼻音に後位するものが原則的で大部分である。特に院政期にはこの類が主なものである。しかし鎌倉時代前後からは、蟹攝・効攝・流攝など母音〔i〕〔u〕となるものを始め、中期頃には遇攝・止攝の字音の後にも生じ、後期の資料には入聲音の後にも起っている例がある。

二、前接字の聲調は、去聲調が最も多く、平聲調がこれに次ぐ。又、連濁字の聲調には去聲調の字には無いものが多い。しかし次第にその例も見られ、聲調の差による比率も變って來ている。

三、連濁するかしないかは、人によっても異なり、又、時代が降るに從って連濁しない語への變化も生じた。鎌倉時代以後の所謂有職家は、鼻音の後に法則的に連濁することを規範として持っていたらしい。

四、連濁の語は、次のように(イ)二つ以上の資料に共通して見られたり、片假名交り文にも多く見られることから、當時の日常語にも廣く存したらしい。この事は、(ロ)前田本色葉字類抄の連濁の語と同一語であったりするものが多く見られることからも指摘することが出來る。

(イ)　二つ以上の資料に共通する連濁の語（声点略。連濁の字に傍線を付して示す）

歡喜（華嚴經・世俗諺文・諸事表白）　勤修（妙法蓮華經・華嚴經・教行信證）　榮啓期（世俗諺文・古今目録抄）　転法輪（妙法蓮華經・華嚴經）　往昔（同上）　三種（四種相違疏・妙法蓮華經）　東方（胎藏界次第・釋摩訶衍論）　三世（華嚴經・教行信證）　心性（同上）　難思（同上）　善根（同上）　境界（同上）　衆生（妙法蓮華經・教行信證）　恭敬（同上）　功德（同上）　種種（同上）　往生（同上）　群生（同上）　神通（同上）　音聲（華嚴經・妙法蓮華經）　進退（三教指歸・本朝文粹）　山川（古文孝經・往生要集）　顚倒（法華百座・教行信證）　重修（諸事表白・教行信證）

(ロ) 前田本色葉字類抄の連濁と一致する語

灌頂　人間　遊際　展轉　勤公　安置　前蹤　變化

東西　同心　貞觀　長者　往古　講說　昇進

懺悔

更に、本稿の連濁の例によって、從來知られていた時期よりも更に溯らせて、院政・鎌倉期に既に存したことの知られる語も少くない。例えば、「進退」は橋本進吉博士が「吉利支丹教義の研究」で吉利支丹資料から指摘されたが、三教指歸仁平四年點に既に見えているのである。又、金田一春彦博士は、「平家讀み方一覽」(日本古典文學大系「平家物語」下卷所収)において、連濁の語をも、室町期の諸辭書や平家物語諸本から示されたが、次下の諸語は、本稿に取上げた院政・鎌倉期の資料に見られるのである。

安置　往古　歡喜　灌頂　精舍　恭敬　賢聖　孔子　興福寺　慚愧

懺悔　三種　丞相　昇進　心中　身心　進退　星霜　善根　前世

太政大臣　堂舍・堂舍　東方　妄想

これらは、本稿の資料に依って、平家物語著作時代の發音を傳えた可能性も生じ、更には當時の軍記物・說話集の漢字の讀みを或る程度、再建することも可能にするのである。

〔注〕

① 濱田敦「連濁と連聲—同化の問題—」(國語國文第二十九卷十號、昭和三十五年十月)。

②「注①」文獻一〇頁―一一頁の取意による。例語はこの稿の筆者の加えたものである。
③奥村三雄「字音の連濁について」（國語國文第十二卷五號）。
④補忘記（貞享版卷下、元祿版卷上）
⑤築島裕「濁點の起源」（東京大學人文科學科紀要」第三十二輯、昭和三十九年四月）
同『平安時代語新論』
⑥春日政治「聖語藏本央掘魔羅經の字音點」（『古訓點の研究』一四一頁）
⑦「∘」を本濁字に付けた例が少數ある。

言說（卷二）、之具（卷二）、波提比丘尼（卷一）、
吾逃（テウ）（卷二）、負重（ヲ）（卷二）、優樓頻螺迦葉（卷一）、
乾闥婆王（卷一）、乾闥婆（卷二）

これらの中には漢音ならば連濁と見られるものもあるが、「比丘尼」「優樓頻螺」「乾闥婆」など呉音讀と考えられるものであり、又、別に、

勤修（卷二）

は、他の箇所には、

勤修

とあり、「∘」を誤ったらしいものも明らかに存する。

⑧連濁の認定に當り、第一次手續として、當該字が韻鏡の清・次清音である字を取出したが、日本の漢音呉音の基となった中國の音韻體系には全清次清聲母の或る種の字が、有聲化（獻化）する傾向があり、中世の日本漢字音でも頭子音濁のものも一部に認められる上に（岡本勲氏「日本漢字音に於ける頭子音の清濁―韻鏡清の字にして日本字音濁となるものに就て―國語國文昭和四十三年十二月號四十四年一月號）、これが個別的な事象であるために、本稿では、第二次手續として、各資料で當該字が語頭などにおいて積極的に濁音をもたないもの、又、差當り、色葉字類抄（前田家本）、類聚名義抄（觀智院本）、法華經單字・法華經音

及び和玉篇を檢し、當該字につき積極的に清音であり濁音をもたない證を得たものを取上げた（これには沼本克明氏の協力を得たが、その手續の表示は割愛する）。本稿に扱った文獻の中で、第一次手續では韻鏡清音であるが、第二次手續において古文獻に濁音の證のあった爲に除外した例は次の諸語である。

・顯　現（高山寺藏念誦次第天養元年點）〔同一資料中に「現當」の例があり、又、觀智院本類聚名義抄に「禾ケン」、法華經單字に「後仙(反)」、法華經音「現」、和玉篇に「玧、俗作現」とある。尚、前田家本色葉字類抄には「示現」とある。〕

・焯　賢（天理圖書館藏三教指歸仁平四年點）〔觀智院本類聚名義抄に「上擯谷六本上濁、禾鼻ン」とあり、和玉篇に「ビン」とある〕

・淺　深（同仁平四年點）淺深（坂東本教行信證）〔觀智院本類聚名義抄に「禾目ム」とあり、法華經單字に「深、蛇娗(反)」、法華經音に「深」とある〕

・命　終（書陵部藏大方廣佛華嚴經卷第四十壽永二年點）命終・命終（坂東本教行信證）〔觀智院本類聚名義抄に「禾シュウ」とあり、法華經單字に「終、受風(反)」、法華經音に「終」、和玉篇に「終」とある〕

⑨ 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信證古點」（東洋大學大學院紀要第二集、昭和四十年九月）

⑩ 「注③」に同じ。

⑪ 沼本克明氏によれば、「穀倉」の連濁は、「穀」の入聲音が開音節化し、流攝・遇攝所屬字の字音と同音となった爲に生じたものと解される。

⑫ 小林芳規「將門記承德點本の假名遣をめぐって」（國文學攷四十九號、昭和四十四年三月）。

⑬ 打聞集の表紙に「從建立中堂戊辰歲至于長承三年甲寅歲三百四十七年也」とある文字、及び、裏書文書からも知られる。

（昭和四十四年十月二十八日）

（國語學國文學助教授）

On "Rendaku (連濁)" in the Periods of Cloistered Emperors and of Kamakura

Yoshinori KOBAYASHI

By "Rendaku (連濁)" is meant the phenomenon in Japanese compounds that the initial voiceless sound of the second member tends to turn voiced. The tendency was apparently accelerated with the incorporation of Chinese into Japanese. The present writer has inquired into the cause and condition of this phenomenon in the twelfth and thirteenth centuries when it seems to have become remarkable, using the contemporary literature.